The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	デステュッド・ド・トラシとビシャとにおける習慣の問題
Author(s)	三輪, 正
Citation	カルテシアーナ. 1989, 9, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66924
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

デステュット・ド・トラシとビシャとにおける習慣の問題[1]

三輪　正

第一章　デステュット・ド・トラシの場合

コンディヤックの感覚一元論をうけつぐトラシの観念学において習慣の問題が重要なものを持つであろうことは容易に察せられる。観念学は観念と記号の分析をこととするが、習慣は観念や記号の形成において大きな役割を果たすものだからである。実際トラシはこの問題に少なからぬ関心を寄せる。彼の習慣分析を概観しよう。

彼はまず習慣がきわめて一般的な事実であることを指摘する。一七九八年の『フランス学士院報告』では「あらゆる印象、あらゆる情動、知覚能力のあらゆる一時的変化は、それらが頻繁に繰り返されると、我々の自我の内に継続的な影響を残し、我々の知性の内になんらかの永続的な性状 disposition を生みだすということを知らない人はいない。(Mémoires de l'Institut National, T. I,[2]—以下 MI と略す—p. 429)」と書き、さらに習慣 habitude という言葉がそれだけで在り方を意味し、しかも何らかの因果性を含意していることを注している。(MI, p.430, note) 習慣の作用や影響の仕方も多種多様である。次に引用する箇所はトラシがいかによく習慣の働きを知っていたかを示してい

る。「それは殆どあらゆる種類にわたっている。それらは全く多様である。真っ向から対立さえしている影響もある。身体の感覚性や精神の道徳的感受性は弱まることもあれば逆に強まることもある。記憶は鈍麻することもあれば非常に活発化することもある。身体の運動はたいへん容易になるが意志に完全に従属する場合もあれば全く意志から独立する場合もある。判断は一方できわめて繊細になりながら他方でもはや意識されないまでに漠然としたものになる。意志は或る時は或る方向へ、別の時にはまったく対立する方向へ向かい、意志決定はしばしば動機がないかのように、それどころか明白な動機に反しているかのようにさえ思われる程になる。(MI, p. 434)」かような多様で相矛盾しさえする影響をどう分析しどう説明すればよいのか。その分析のための手掛かりとしてはトラシは「種類の異なる知覚に対して習慣は異なる仕方で作用するものでありこのことは習慣のあらゆる影響を説明するに足りよう」と書いている。(MI, p. 435)この言葉はやや簡潔すぎるとはいえ、習慣の影響の仕方の違いをとおして知覚等の諸能力の異同をとらえようとしたビランの方法を先取りするものとしては、興味深いものを持つと言えよう。[3] しかし奇妙なことにトラシはこの言葉を十分生かそうとせず、習慣の多様な影響をば同一の性質のものとする。彼の場合感覚、運動、記憶、欲望、判断に対する習慣の影響がすべて、ただ一種の影響すなわち判断に対する影響に還元されるのである。

彼の言うところを見よう。感覚については、感覚の単なる反復はいかなる新しい性状 disposition をも生みださないとトラシは言う。(MI, p.436) 感覚の反復がもたらす変化は比較の働き、従って判断の働きによるというのである。トラシが引いている例によれば判断力を欠いた愚鈍な人が同じ騒音にくりかえし何回でも驚くのはそのためだという。ところで苦痛の感覚がくりかえされるにつれ増大する現象を説明してトラシはそれは身体の現実の消耗によるとしている。(MI, p. 435) 生理学的な要素を導入するこの説明はそれ自体が上に述べられたことと不整合であり、習慣現象の

説明におけるトラシの混乱を示していると言えよう。同様な混乱は運動の習慣の説明にも見いだされる。(Cf. MI, p.437-439) トラシは運動の習慣に、判断を伴って習慣的となった運動と判断を伴わずに習慣的となった運動とを区別し、前者は意志に従い後者は単に機械的になると言っているが、それ以上の説明は生理学に委ねるのである。記憶に対する影響の仕方についてのトラシの説明は明晰さを欠いている。欲望の習慣については、欲望は判断に関連し従って欲望の習慣は判断の習慣と同様であると言うにとどまっている。判断そのものへの習慣の影響については次のように書いている。「なんらかの判断が我々のなかで頻繁になされると、その判断とそしてその同類とは我々にとって極めて容易になる。そして…容易な判断は我々の注意を引き付けないから我々に意識されなくなる。そこから、多数の判断がほとんど限りなく容易になり迅速になって、ほとんど意識されない無数の活動をほんの一瞬のうちに行いながらそれを説明することが我々にほとんど不可能であるという事実が出てくる。(MI, p. 441)」そしてトラシはこの事実が習慣のあらゆる作用を充分に説明すると言っている。

しかしかようなことで習慣にまつわるあらゆる困難が説明しきれるとは到底思われない。デルボスは、かような言葉では習慣の作用の多様さを説明できていないから問題となっている諸困難に「極めて不十分、極めて皮相にしか」対応できていない、と書いている。[4] マディニエも同様に「それによって記憶喚起における大きな容易さは説明できても、容易さにともなって喚起が無意識化することの理由の説明はおそらくより難しくなるであろう」と書いている。[5] 私にはトラシの説の理解の鍵は次の文章にあるように思われる。彼は判断と習慣とに関して次のように述べている。「習慣は我々の判断の多様さ、迅速性、容易さの産物であり、判断はこれらの性質のすべてを人為的記号の使用に負っているから、習慣のほとんど全ての作用が記号に属せられるべきものであること、記号がより完全であればある程それだけ強力であ

り多数であることは明らかである。(MI, p. 444)」この文章はトラシの場合習慣が判断に影響するというよりむしろ逆に判断が習慣を作るものであると考えられていることをよく示している。判断が習慣に先立つというのである。このことは先に引用した習慣の種々相にたいしてトラシが与えた説明に照らしてみても立証されよう。たとえば彼は習慣による感覚の鈍化を比較作用の迅速化によって説明するが、比較は判断を前提するのである。また運動の習慣においても、判断をともなって習慣的となった運動のみがトラシが問題にするものである。いずれの場合も判断が習慣を形成するのであって、その逆ではないのである。かような点から見て習慣に対するトラシの一般的態度は、観念連合を習慣形成の要因とする主知主義的なそれに近いと言ってよいであろう。

トラシのこの習慣に対する一般的態度は何に由来するだろうか。これに関連して注意されるべきことは一七九六年の『フランス学士院報告』の場合、習慣は運動から独立に考察されているということである。運動にたいする習慣の影響についても語られていたことは上に見た。しかしこの報告で論じられるのは先に見たように判断をともなう運動習慣であって運動一般のそれではない。ところで習慣の観点からすれば運動が意志的なものから非意志的なものへ変化してゆくその移行過程こそが問題である。トラシは非意志化した運動を彼の『報告』から除外している。彼にとっては運動に含まれる判断が問題であって、運動自体は問題ではなかったのである。

コンディヤックの場合、必ずしも明白に言われていないにせよ、習慣は運動と不可分の関係にあった。運動の能力に動覚 motilité[6] の名を与えて、認識において運動がはたす役割を明らかにしようとしたのはトラシの功績である。この動覚こそトラシの場合、外界の存在を我々に教えてくれるものであり、「我々の自我と感覚される宇宙との間の唯一の絆である (MI, p. 302)」ものであり、それなしにはいかなる判断も認識も記号もないとされるものである。(Cf. MI,

p. 316, 33 -6, 445) この動覚の理論はそれじたいとしてはなかなか興味深いものを持っている。しかしトラシはこの理論を彼の習慣論のなかに取り入れているようには思われない。それどころか彼は、判断を介して間接的に運動性を問題にする場合を除いて、その習慣論から運動性の契機をまったく取りのぞこうとさえする。トラシの場合動覚の概念の登場とともに習慣概念は、それがコンディヤックにおいて果たしていた役割をうしない、いわばかっての地位から追放されるように思われる。

しかしそれでもなお習慣は観念学にとって重要な問題でありつづける。トラシは習慣が「観念学と呼ばれる学問のほとんど全ての困難を構成するものであり (MI, p. 448)」、また「観念学のあらゆる疑問点を形成するものである (MI, p. 444)」ことを言う。困難のこの表明の意味するところは何だろうか。『学士院報告』ではこの点を明記していないが、恐らくそれは、習慣には判断論や記号論だけでは片付かないものがあることの確認ではなかろうか。たとえばトラシの言うように習慣が記号に依存するものだとすると、記号が習慣の影響を受けて変形してゆく事実—これについてはトラシ自身しばしば語っている (Cf. MI, p. 412-6) —をどう説明すればよいのか。恐らくかような難点こそトラシをしてその主著『観念学要綱』(Eléments d'idéologie—以下 EI と略す)[7] の第一部で習慣について更に掘下げようとさせたものであろう。ところでこの書ではトラシは習慣を運動に関連づけつつ考察するのだが、しかし今度はまったく運動との関連においてのみ考察するのである。

『観念学要綱』でも始めに『学士院報告』の場合と同じように習慣の語の一般的意味が言われる。しかしそれに続いて諸能力への習慣の影響の考察にはいるにあたって『観念学要綱』では動く能力 faculté de se mouvoir への影響がまず検討される。この能力は「その最も広い意味においては他のあらゆる能力を包含する (EI, p. 186)」からだと

トラシは言う。動く能力つまり勝義の運動能力への習慣の影響はよく知られている。「どんな運動であれ一つの運動をしばしば繰り返せば繰り返すほど我々はその運動をより容易かつ迅速に行えるようになるということを知らないものはない」と彼は書いている。しかしそれほどよく知られていないが「極めて真実な」ことは、「運動がより容易かつ迅速になればなるほどそれだけその運動は感覚されなくなり、しばしばいかなる感覚も起こしえなくなり遂には全く意識されないようになることだ（EI, p. 187）」とつけくわえられている。運動が反復されてより容易かつ迅速になるにつれその運動にたいする意識は少なくなり消滅するにいたるということはトラシ以前にもよく知られていた。ところでトラシはこの運動習慣の事実をとおして一切の習慣を説明しようとする。あらゆる知的活動は動く能力に依存するからして、運動習慣と同じ変化を習慣からこうむるはずだというのである。（Cf. EI, p. 188-9）動く能力を強調する点にはコンディヤックの運動的触覚の理論の影響が明らかだが、トラシはかような観点から習慣のあらゆる影響形態を『観念学要綱』ではもっぱら運動へのそれにもとづいて説明しようとする。主役が判断から運動へとかわるのである。

たとえば感覚の習慣についていえばトラシは次のように説明する。「なんらかの感覚を知覚するときにともなう運動は、運動が頻繁に繰り返されるにつれてより迅速かつ容易になる。したがってしばしば経験された感覚は我々にとってより不活発になるのでなければならない。（EI, p. 189）」つまり感覚への習慣の影響は運動へのそれの一特殊例だというのである。トラシがこの書で記憶、欲望、判断への習慣の影響を論ずる仕方はほぼ同様である。（Cf. EI, p. 191-3）ところでここで注意されるべきことはトラシがその説明において常に「器官運動 mouvement organique」を介入させるということである。彼にとって感覚も欲望も判断もいずれも器官運動を前提し、それに由来するものなのである。（EI, p. 193）事情がかようなものであれば、問題を終局的に解決するものは運動の生理学的研究以外にないことにな

ろう。我々は先に『学士院報告』においてトラシが意志から独立な習慣的運動の説明を生理学に委ねていることを見た。習慣問題の研究後メーヌ・ド・ビランが純粋に能動的主体的なものの追求に向かうのに対してトラシはむしろ生理学的研究へ向かう。マディニエはこの違いを説明して、トラシは彼が既に努力と呼んでいる運動と抵抗との二元性を能動と受動との対立として考えなかったが故に動覚と他の感覚との対立を習慣の作用の対立に関係付けることがなかった、と(8)している。恐らくここにデステュット・ド・トラシとメーヌ・ド・ビランとを区別する主要な点があるであろう。トラシがその動覚の概念によってビランへの道を開いたことは確かである。しかしトラシは習慣が含みもつ同時に能動的でも受動的でもある性質を重く見ようとせず、いわば運動の一元論へ、生理学的研究へと向かい、主体固有の能動性に目をつむるのである。

注

(1)　本論文はもと拙稿『一九世紀フランス哲学における習慣の問題』(『カルテシアーナ』第五号「モンテーニュと習慣の問題」注1参照)の「メーヌ・ド・ビラン以前の習慣の問題」と題した第一章の4として書かれたものである。デカルト、パスカル、コンディヤックの場合と同様に全面的に書き改めようかとも思ったが、若い時に書かれたものにはそれなりの特色もあり、ほぼフランス語原文どおりの訳文をのせることにした。その後の知見で補うべきだと思ったことはすべての注の形にした。

デステュット・ド・トラシ Antoine-Louis-Claude Destutt de Tracy (1754-1836) の哲学については観念学 idéologie の創始者或はむしろこの言葉の作者として以外に顧みられることが少なかったが、近時記号論や社会思想関係等でかなり注目を引くようになった。ここでは次の書をあげておく。

E. Rastier, *Idéologie et théorie des signes*, Analyse structurale des Eléments d'Idéologie d'Antoine-Louis-Claude Destutt de Tracy, Mouton, 1972.

B. W. Head, *Ideology and Social Sciences, Destutt de Tracy and French Liberalism*, Nijhoff, 1985.

(2) *Mémoire sur la faculté de penser*, par Destutt (Tracy), membre associé, lu le 2 floréal an 4. トラシが一七九六年（革命暦四年）に口頭発表し、一七九八年に『フランス学士院紀要 Mémoires de l'Institut National des Sciences et des Arts』に他の発表とともに掲載したもの。

(3) Cf. Maine de Biran, *Influence de l'habitude sur la faculté de penser*, P. U. F., 1953, p. 10 et p. 43.

(4) V. Delbos, *Maine de Biran et son oeuvre philosophique*, Vrin, 1931, p. 309.

(5) G. Madinier, *Conscience et mouvement, étude sur la philosophie française de Condillac à Bergson*, Alcan, 1938, p. 57.

(6) ここに動覚と訳した motilité はコンディヤックの触覚概念のうち特に運動的触覚をさす概念と考えられる。デルボスはこの概念について、それが他の感覚と根本的に異なることのない一種の感覚であることを言っている。Cf. Delbos, op. cit., p. 86.

(7) Destutt de Tracy, *Eléments d'idéologie*, Première Partie, Paris, Levi, 1824. なおこの書には最近次の二種の復刻版が出ている。
Eléments d'idéologie, Introduction et appendices par Henri Gouhier, 4 vols, Vrin, 1970.
Projet d'éléments d'idéologie, Faksimilie-Neudruck der Ausgabe Paris 1801-1815. Frommann-Holzboog, Stuttgart,

(8) Cf. Madinier, op. cit., p. 52.

第二章　ビシャの場合

組織学の祖として不朽の足跡をのこすビシャの名著『生と死との生理学的研究』[9]（Recherches physiologiques sur la vie et la mort —以下 RP と略す）には習慣の問題の考察においてもメーヌ・ド・ビランへの影響の点からみても看過できないものがある。この書の生を扱った前半（第一部）の主要テーマは器官的生 vie organique と動物的生

vie animale との有名な区別である。動物的生としての感覚や運動は対称的な器官と継続的な活動とによって特長づけられ、これにたいし器官的生は消化や循環に典型的に見られるように左右不対称な器官と連続的な機能とによって特長づけられる。後者が感情ないし情念の起源であるのにたいして前者は知性と意志との起源をなすものである。つづいてビシャはこの二つの生を習慣の面から区別して、動物的生が習慣の影響を受けるのにたいし器官的生は習慣から独立だとする。(RP, p. 37) 排泄のように習慣を受け入れるが一見したところ器官的生に属するようにみえる機能は実際は動物的生に属するのである。(RP, p. 45) 器官的生がはじめから完全であり教育を必要としないのにたいして、動物的生は教育によって大きく変わりうるのである。こうしてビシャは習慣の成立する領域が動物的生のそれであることを立証するのである。

ところで以上のことにもましてビシャのこの書で興味深いことは動物的生における習慣の影響についての彼の考察である。「動物的生においては習慣によってすべてが変化する (RP, p. 37)」と彼は言う。しかしその変化の在り方には知性の二つの様態—感覚と判断—によって大きな違いがある。習慣はこの二者にまったく相反した仕方で影響するのである。すなわち習慣は感覚をば麻痺鈍化し判断をば迅速確固としたものにするのである。まず感覚への影響の仕方をみてみよう。一般的にいって習慣は、苦痛の感覚であれ快適な感覚であれあらゆる感覚を、両者の中間である無感覚の状態にもたらす。身体組織にとって破壊的な損傷にともなう感覚はこのことの例外だが、かような感覚をビシャは絶対的感覚と呼んで一般の相対的な感覚から区別し、習慣の影響をうけるのは相対的感覚のみだとしている。(RP, p. 38) 逆にいえば習慣の影響をうける感覚は相対的で、うけない感覚は絶対的であることになろう。ところで相対的な感覚にたいするかような影響の仕方をビシャは、『学士院報告』におけるトラシとまったく同じように、現在の感覚と先立つ感

覚とのあいだの比較ということによって説明しようとする。感覚器官が刺激から受ける変化は現在も過去と同様である。それにもかかわらず感覚が消滅するのであれば、その消滅がおきるのは感覚器官においてではなく、感覚を知覚している精神 âme においてでなければならぬ。つまり精神が現在の感覚と過去の感覚との間でおこなう比較作用によるのでなければならぬ。これがビシャの考え方である。(Cf. RP, p. 40-2) これは感覚習慣の主知主義的な説明であり、判断の要素を介入させることである。このことは判断の習慣が感覚のそれとは対蹠的なあらわれをする点から見てかなり奇妙なことに思われる。我々は先にトラシが、感覚の減退の原因を判断の習慣においていることを見た。ビシャはトラシほど性急な断定はしておらず、感覚の習慣と判断の習慣との性質上の違いを固執しつづける。しかし感覚習慣の説明におけるこの困難は、判断習慣の説明にも困難を招いているように思われる。実際ビシャは判断の習慣に対しては感覚の習慣の際のような理論的説明の試みを行わず、実例をあげるにとどめている。たとえば花々が咲き乱れる野原で始めは多様な香りに幻惑されて個々の花を識別することができない、習慣が香りを取りさって初めて判断が可能になる (RP, p. 44) というのであるが、この例じたいもビシャの説明の不十分さを示しているであろう。感覚の習慣の説明にいったん判断の契機を導入した以上、感覚の習慣と判断の習慣のあいだの違いの説明が彼にとってもはや不可能であったように私には思われる。ところでビシャは感覚の習慣の説明のあとで比較作用について、比較は「反省 réflexion の産物ではなく、対象の第一印象からおのずから生じた結果だ (RP, p. 41)」と言っている。この言葉はこれだけでは余りに簡単すぎるうらみがあるが、感覚と判断との区別に関して別個の展開を期待させうるものであろう。[10]

なおビシャの習慣論が、『学士院報告』におけるトラシと同様、運動性を考慮に入れていないということも注意しておくべきであろう。ビシャは「動物的生の諸器官の教育における社会の影響」と題した章で、動きの習慣 habitude

d'agir が行動を完全にする、と言っている。(RP, p. 122) 音楽家が耳を、画家が目を、舞踏家が手足を動かし働かせることを通してその活動を完成させるように、というのである。しかし彼はこの考えをその習慣論に織り込むことはしなかった。とはあれ習慣の持つ能動的かつ受動的な性質を明確にしたのはビシャの功績であり、此の点で彼はメーヌ・ド・ビランおよびラヴェッソンに大きな影響を及ぼすのである。(11)

注

(9) Bichat, Xav., *Recherches physiologiques sur la vie et la mort*, 3e ed., 1805, Paris, chez Brosson et chez Gabon. 初版は1800年に出ている。

(10) ビシャは第一部第八章第四節等で運動習慣の形成を教育との関係で、さらに社会的習慣との関係で論じている。職業を、感覚を主に使うもの、判断を主に使うもの、体力を主に使うものの三種に分け、それぞれにおいて習慣が大きな役割を果たすことを言っているあたり興味深い。(Cf. RP, p. 122) また当然のことであるが判断の習慣が単に特定の判断を固定するだけでその矯正に向かうものでないこともいっている。(RP, p. 133)

(11) ビシャのメーヌ・ド・ビランに対する影響については次の書が参考になる。
Maine de Biran, *Mémoire sur la décomposition de la pensée*, éd. P. U. F., T. 1. p. 105–9.
Bréhier, *Histoire de la philosophie*, 3e éd., P. U. F., 1948, T. 2, p. 614.